研究ノート

カリキュラム・マネジメントを支える音楽教師の視点
―半構造化インタビューを通して―

甲斐　万里子*

The viewpoint of music teachers for curriculum management
― Analysis of semi-structured interviews with music teachers ―

Mariko KAI*

【要旨】
本研究の目的は，中学校の音楽教師が，子どもたちの姿や地域の現状等に基づいた授業をどのように計画し展開するのか，その背後にある視点を明らかにすることである。カリキュラム・マネジメントの確立との関係から，音楽教師が授業を展開する際に，どのように子どもの姿を捉え実践をデザインするのかを検討した。本研究では，日頃からカリキュラム・マネジメントを意識した音楽教師 M を対象に，年間指導計画の分析および半構造化インタビューを行った。その結果，3 学年全てで扱っている教材があった。その意図やねらいについて尋ねたインタビューを分析した結果，「生徒に応じた教材の開発」,「短期的および長期的な成長を見通した授業計画」の 2 つの項目が得られた。このことから，生徒の課題に応じて学校行事の位置付けを考え，継続的に取り組む教材および活動を構成することで，教科の枠組みを超えた長期的な成長や課題の解決を目指せることが分かった。

キーワード：カリキュラム・マネジメント，教材研究，授業計画，半構造化インタビュー

はじめに

本研究の目的は，中学校の音楽教師が，子どもたちの姿や地域の現状等に基づいた授業をどのように計画し展開するのか，その背後にある視点を明らかにすることである。

今日，「子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて，各学校が設定する教育目標を実現するために，学習指導要領等に基づきどのような教育課程を編成し，どのようにそれを実施・評価し改善していくのか」（文部科学省ホームページ，2017）というカリキュラム・マネジメントの確立が求められている。「カリキュラム・マネジメント」については，校長や園長を中心としつつ，「教科等の縦割りや学年を越えて，学校全体で取り組んでいくことができるよう，学校の組織及び運営についても見直しを図る必要がある」とされている（同上）。ここで目指されているカリキュラム・マネジメントは，「特定のパターン化されたカリキュラム・マネジメントの方式や形式を，各学校に普及・定着させることを意図するものではない」と天笠（2017，p. 26）は指摘する。無藤は，さらに具体的に説明している。カリキュラム・マネジメントの実施について，3 つのことが重要だと述べる。それは「第一に，学校教育また教科等の目標を吟味し，教育課程と指導計画を検討するこ

＊　かい　まりこ　上野学園大学音楽学部グローバル教養学科
相模女子大学学芸学部子ども教育学科　非常勤講師

と」，「第二に，教育の目標の実現を点検し，改善に向けて何をしたらよいかを把握し実行すること」，そして，「第三に，必要な人的・物的資源等を地域等の外部の資源と活用しながら，効果的な組み合わせを考える」というものである。さらに無藤（2017）は，「要するに，与えられた各種資源を活用し，目標に向けてのやりくり算段を行うこと」と言い換えている（p. 17）。

新学習指導要領総則におけるカリキュラム・マネジメントの定義を踏まえて，吉川（2017，p. 84）は，音楽科に必要な視点を 3 つ挙げている。それは，「音楽を生かした学校行事や教育活動をマネジメントする」，「学年間の題材のつながりをマネジメントする」，「題材配列や題材内の教材配列をマネジメントする」の 3 つである。これらと同様の視点から，現場の教員によっても，カリキュラム・マネジメントを行う上で重要とされる「教科や学校の枠をこえて働かせていく資質・能力」（平野他，2017，p. 14）を身につけさせるために，常時活動の活用と充実が有効として多くの実践例が報告されている（平野他，2017）。

平野ら（2017）には，「僕は『子どもの姿』と『どんな教材か』と『学習指導要領』，この 3 つをもとにして計画を立て」ると言い，「特に音楽づくりの場合は教科書にない教材をやることが多いから，それが子どもの実態とずれてないか，指導要領とずれてないか」についてよく考えると語る（中島，高倉，平野，p. 133）。この言葉からは，指導目標に沿って授業の計画を立てるに当たって，常に創意工夫を凝らしている様子が窺える。このような教員の姿からは，カリキュラム・マネジメントの考え方が既に現場の教員に根付いているように思われる。

しかし，そのような授業を展開する際に，どのように子どもの姿を捉えて，どのように実践をデザインするのか，つまり，カリキュラム・マネジメントの観点からは，実践をデザインする際の過程について具体的に示されてこなかった。そこで，本研究では，学校全体でのカリキュラム・マネジメントを意識した音楽科の教員が，どのように授業を計画し，実践を進めていくのかを明らかにする。

1. 対象について

1.1. 教師 M について

杉並区の公立 A 中学校で音楽専科として勤務する 40 代の女性教師 M（以下 M）を対象とした。M の A 中学校での勤務は 3 年目で（2017 年 8 月現在），3 学年全ての音楽の授業を担当している。日頃から，最先端の教育に関する動向への関心を高くもち，研修や研究会に足繁く通う。また，大学時代に専攻していたピアノに限らず，自身の音楽的，教育的な資質や技能を高めるべく，声楽（ボイストレーニング），三味線や箏などのプライベートレッスンに定期的に通っていた。このように，M は，授業を通して M が自ら学ぶべきことを決め，研鑽を積み，新たにできることを増やしながら，目の前にいる子どもたちにどのような授業ができるかを日々考え，最善を尽くそうと奮闘していた。

本研究は，カリキュラム・マネジメントの観点をもっている音楽科教員の役割を検討するものである。そのため，上で述べたような，日頃から現代的な課題や動向を把握しながら自分の使命を考え，日々の授業を生み出していく姿勢の教師 M が，本研究の対象として最適であると判断した。

1.2. データの収集方法

教師 M が授業を計画する際に，どのような視点をもち，実践の際にはどのような点に気をつけているのかを検討するには，年間指導計画およびその立案の背後にある M の狙いや実際の授業の様子を検討することが効果的だと考えた。そのため，本研究では，学年を越えた学習や生徒の姿から計画を変更する部分を明らかにするための資料として 1）M が作成した年間指導計画を，そして，1）の結果を基に計画の狙いを聞き取るために 2）M の発言を分析の対象とした。M に対しては半構造化インタビューを行った（2017 年 9 月 7 日 A 中学校第 1 音楽室にて）。

1.3. 分析の方法

M が子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき，どのように指導計画を考え，実施するのかを見るために，まず，年間指導計画を検討した。M は，授業を進めながら，年度始めに作成した年間指導計画を適宜修正し，作り直していた。そこで，まず，修正前の年間指導計画と修正後のそれとを比較し，修正箇所を特定した。そして，修正を行った意図を聞き取るために，半構造化インタビューを行った。インタビューは IC レコーダーで録音し，録音した記録を基に逐語録を作成した。M の発言がどのような要素で構成されている

かを検討するために，KJ 法[1)]で分析した。これらの結果を総合して，音楽教師が生徒の姿から授業を計画するまでの過程と視点を検討した。

2.　年間指導計画の検討とインタビュー項目の作成

年間指導計画を検討した結果，2017 年 9 月現在，3 学年で同じ教材「江戸木遣り」を取り上げていることがわかった。また，題材を設定して秋に授業を行うだけではなく，夏以降，5 月から指導を始め，常時活動のように，毎授業の初めに短時間取り組む。また，これらについては，題材名や指導内容について，年度始めのものから細かい修正が施されていた。この結果を基に，半構造化インタビューの質問項目を作成した。基盤となる項目は次の通りである。

【表 1　インタビューでの主な質問項目】

指導計画について	・3 学年で同じ題材であっても，身に付けさせたいと思う資質や能力は異なりますか ・そのような考えから，授業の内容を考えることはありますか ・今年度，年間指導計画が途中で修正された部分について，計画していた内容を変えようと思ったきっかけを教えてください ・「江戸木遣り」を全学年で行う周年行事は 10 月ですが，授業では 5 月頃の早い時期から取り組まれています。（5 月の生徒の様子を受けてなど）特に理由はありますか。
教材研究について	・今年度，「江戸木遣り」をされようと思ったきっかけを教えてください ・「江戸木遣り」の授業を行ってみて，うまくいったところや，意外とうまくいかなかったところ，予定通りに進まなかったところを教えてください ・他の教材に比べて，「江戸木遣り」だからこそ効果的に学べたと思うところがあれば，教えてください。あるいは，「江戸木遣り」の時に特に輝いていた生徒がいたら，何かエピソードを教えてください。 ・「江戸木遣り」を行ったことで，音楽の授業に限らず，その後の生徒の様子が変わったり，ワークシートの記述の内容に深まりが出たりといったことがありましたか。

3.　結果

半構造化インタビューを分析した結果，得られた切片の数は 113 であった。それらは大きく「生徒に応じた教材の開発」，「短期的および長期的な成長を見通した授業計画」の 2 つの項目に集約された。次に，各項目について順に論じる。

3.1.　生徒に応じた教材の開発

M は，生徒の気質やクラスの雰囲気をよく観察し，いつ，どのような教材を取り上げるべきかを判断する。M が A 中学校の生徒に対して抱いている印象を述べている部分を以下に引用する（括弧内は筆者による）。

> （A 中学校の生徒は）何でも落ち着いてできるんだけど（後略）パワーがなくて，物足りないんだよね。（落ち着いてできることは）良いことなんだけど。でも，その，なんというか，本人はそういうものだと思って育てられているから，わかんないんだよね。（中略）それが普通だと思ってきたから。それに気づくのに 8 年かかりました。なんでこの人たち黙っているのかなって思ってた。すごい苦労した。ほんと，（反応や表現を引き出すために自分が）バカになって。（前の時間にやっていた）ドッチボールでも，もっと「イエーイ！」って下町（の学校）ではなるところでも，ならないし。あれはあれで楽しんでいるんだよね，あの子たち。

この発言にあるように，M は，生徒の気質や自己表現の仕方について，過去に指導してきた生徒とは異なる印象を受け，そのことで授業での振る舞いに苦戦し，工夫の必要性を感じ，試行錯誤してきた。そのような生徒の気質やクラスの雰囲気を受け止めつつも，表現においては，M の言う「夢中で自分を表現」するような経験をさせたいと感じ，生徒 1 人 1 人のもって生まれた声で，張り上げるように表現する教材を検討した結果，「江戸木遣り」が良い

と判断した。

Mは上記のことに加えて，どのような生徒に対しても「江戸木遣り」の教材性が高いと指摘する。その上で，「生徒や学年の色によって，扱う場所を変える」と言う。つまり，同じ教材を使う場合にも，実際に歌ったり演奏したりする部分は，生徒や学年によって異なるということである。また，Mのこのようなアイデアに加えて注目するべき工夫として，ワークシートの活用がある。Mは，「落ち着いている」と評価しているA中学校の生徒に対して，同時に「内側ではしっかり思ったり考えていると思う」とも見ている。そこで，授業中には発言できなかったり，授業中からさらに考えを深めたりする機会として，「他の学校よりもしっかり」（インタビュー中のMの発言）ワークシートを作成する。これは，ワークシートに取り組ませる回数や書かせる文章量や問の質について，比較的負荷を高くしているということである。

さらに，現在M自身が抱いている課題として，生徒との対話による授業の進行を挙げる。Mは以前から生徒同士の対話によって，学習の深まりを促せるような授業を意識してきた。指導を行う中でさらに芽生えた意識として，教師からの発問によって，もっと生徒の学習を深められるということに気づいたと言う。この対話についての課題に関しては，まだ具体的な方策を考えている最中だが，ワークシートでの工夫と同様に，生徒の表現や思考を一層発展させるために，常にMが生徒の様子を逐一判断しながら関わり方や指導の方法，教材を生み出していることが分かる。

3.2. 短期的長期的な成長を見通した授業計画

2. で述べたように，Mは，「江戸木遣り」を3学年全ての授業で指導する。それは，A中学校の生徒たちに対してもっている問題意識に基づく。Mの問題意識とは，例えば入学したての1年生の場合，西洋芸術音楽の発声ばかりを優れた声だと思っている生徒が多いということである。このために，西洋の発声がうまくできない生徒が，音楽の授業において，表現に前向きになれないことがあると言う。このことは，小学校で「曲種に応じた発声」を学んでいたとしても，一旦，頭声発声に苦手意識をもってしまうと，音楽の学習全体への意欲が下がったり，自信がなくなったりするということなのかもしれない。同様に，2年生，3年生にもそれぞれMは課題を感じており，その現状を踏まえて，3学年で「江戸木遣り」を行う。Mが各学年に対して見出している課題と，「江戸木遣り」を行うねらいを一覧にしたものを次に示す。

【表2　Mが考える各学年の課題と「江戸木遣り」を行うねらい】

学年	課　題	ねらい
1年	声をつかった表現に前向きになれない	さまざまな声の良さを知り，自分の声に自信をもつ
2年	落ち着きがなく，表現に集中できない	音をよく聴き，表現を工夫する
3年	ピッチがずれ，「がなり声」で歌ってしまう	異なる発声の方法を発見させて，意図する表現を実現させる

（作成：甲斐）

表2の3年の欄にもあるように，生徒が自信をもって表現できるような教材を考案した経緯については，歌唱の活動で正しいピッチで歌えない男子学生とのやりとりがある。Mは，「変声が終わっているはずなのに，何回やっても…真面目な子なのに，とれないのよ。音がね。（中略）それで音がとれなくて，（声を）出そうとすると，どうしても地声になってしまう」場面に直面することがよくあると言う。そのような時に，発声やピッチを正しくとれない生徒も生き生きと表現できる活動として，日本の伝統的な歌唱に着目し，教材性を考慮しながら教材を探した結果，「江戸木遣り」に行き着いた。そして，「江戸木遣り」の活動を進める中で，生徒が発声の違いに気がついて，西洋の発声ができるようになることに気づいたと言う。このことについてMが語った部分を引用する（括弧内は筆者による）。

> 両方よくなるじゃない？　頭声の方（西洋の発声）も歌えるようになるから，声の質を揃えるだとか，なぜ透き通った声だと合唱で合うか，みたいなところにも繋がっていくので。だから，時間はないんだけど，大事だから，両方やるようにしているのね。

この発言から考えると，「江戸木遣り」を授業の冒頭で毎回短時間ではありながらも取り上げていた理由を次のように理解できる。すなわち，毎回取り組むことで，題材としている内容と両方に取り組むことで，知らず知らずの内に音色や発声の方法などを比較し，徐々に発声の違いに気づくようになるという，生徒の長期的な学習を見越して，ある程度の時間を要すると判断した上での計画なのである。「江戸木遣り」を継続的に行うことには，次のような狙いがある。まず，学校行事での披露時には，表現に前向きになって生徒全員が生き生きと積極的に参加できるということである。そして，長期的な取り組みの中で，日本の伝統的な音楽の良さに自発的に気づくことができるということである。これらのことに到達できれば，音楽的に優れた表現を実現することと，教科の枠組みを超えた成長につながるという，その相乗効果を狙ったものなのだ。上述のような，音楽への苦手意識や発声についてなどの個別の課題は，新たなクラスでの年度が始まり，授業をある程度行う中で見えてくることだろう。このように考えると，年間指導計画の内容に修正を加えていたことも納得できる。

以上のように，M は，生徒と関わり，個別の課題を感じながら，どのように授業を通して成長を支援するのかを考え，短期的な目標と長期的な目標を据えることで，日々の各授業で達成を目指すのか，学校の行事と絡めて達成を目指すのかを検討して，指導計画を具体化させていくのである。

4.　考察

本稿では，カリキュラム・マネジメントを支える実践の背後にある音楽科教員の視点を明らかにするべく，主にインタビューの分析を基に論じてきた。その結果，子供たちの姿や地域の実情等を踏まえた授業を展開するための視点として「生徒に応じた教材の開発」「短期的および長期的な成長を見通した授業計画」の 2 つがあることが分かった。

これまでにも，現場の教員を中心に，教科を超えた学習や「確かな学力」をつけるために，常時活動が有効であることは示されてきた。本研究で明らかになったのは，このことに加えて，生徒が抱いている課題に応じて学校行事の位置付けを考え，継続的に取り組む教材および活動を構成することで，音楽的な能力の向上だけでなく，教科の枠組みを超えた長期的な成長や課題の解決を目指せることが分かった。また，生徒の姿に応じた創意ある授業が展開できる背後には，生徒の表現に対する前向きな姿勢を支えるために有効な方法を考え，時に指導のスタイルや教材の使い方を見直し，変化していこうとする姿勢があった。M の姿からは，今日求められる，教員の創意工夫が不可欠と言われるカリキュラム・マネジメントを実現するためには，教員が生徒の姿をよく観察し，課題を見つけ，その目の前にいる生徒の課題に対応する形で，各学校行事の位置付けを考え直したり，教材の開発を行ったりする姿勢が必要なのである。

本研究では，M が「教材性が高い」と語った「江戸木遣り」の特徴および授業の展開については詳述できなかった。また，長期的なねらいの達成と M の実践の関係について言及するにも至らなかった。今後は，本稿の結果を基に研究を継続し，これらの課題の解明を目指したい。

謝辞

本稿の執筆にかかりまして，A 中学校の M 先生には，授業の観察やインタビューなど，お忙しい中大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

注

1）KJ 法とは，川喜田二郎が創案した，情報を整理し仮説の発想を導く方法。インタビューや観察で収集した情報を区切っていき，それぞれを「同類，対立，相関，因果，上下位などの関係に置いて全体の構造を図解する。その過程で異質の情報の結合による創造的な発想が導かれるとされる。」（高下保幸「KJ 法」中島義明他編『心理学辞典』，有斐閣，（2003）pp. 213〜214.）

引用文献

天笠茂（2017）「教育課程を軸に学校に好循環を生む――カリキュラム・マネジメントの実践に向けて――」『中等教育資料平成 29 年 6 月号』学事出版株式会社，pp. 24〜27.

中島寿，高倉弘光，平野次郎（2017）『音楽の授業で大切なこと――なぜ学ぶのか？　何を，どのように学ぶのか？――』東洋館出版社.

平野次郎編（2017）『小学校新学習指導要領のカリキュラム・マネジメントシリーズ「資質・能力」を育成する音楽科授業モデル』，学事出版.

無藤隆（2017）「新学習指導要領が果たす役割」山下薫子編『平成 29 年版 小学校新学習指導要領ポイント総整理音楽』東洋館出版社，pp. 12〜17.
文部科学省「4.　学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364319.htm（2017 年 8 月 20 日閲覧）。
吉川武彦（2017）「授業改善の視点②音楽科で目指すカリキュラム・マネジメントの充実」山下薫子編『平成 29 年版小学校新学習指導要領ポイント総整理音楽』東洋館出版社，pp. 84〜87.